アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集 広がる教職員交流事業……2
ユネスコスクールの活動報告……5
ESD Foodプロジェクト……7
ユネスコ国際セミナー……8
全日本高校模擬国連大会……9
若者プロジェクトの中間報告ほか……10
コラム「東奔西走」……11
活動メモ……11

韓国の教職員を歓迎する横浜市立永田台小学校の児童たち（ACCU撮影）

No.398
2016年3月号

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集

広がる教職員交流事業

未来を担う子どもたちへ 最大のエールを送るために…

目的

児童・生徒にとって学校の先生は特別な存在です。一日の大半を過ごす学校で、先生からの影響は計り知れないものがあります。ACCUの国際交流事業では教職員に焦点を当て、参加することによって、学びを深め、多文化・異文化を理解し、先生自身が変容していくことを目的としています。「先生が変わる　子どもが変わる　未来が変わる　学びの場」を提供すべく、2001年から文部科学省の支援と国際連合大学の委託を受け、教職員国際交流事業を企画・運営・実施しています。↘

展望

今、ACCUは次の10年へ向けて動いています。これまで培ってきた歴史ある教職員国際交流事業のエッセンスを十分に活かしつつ、さらに学びを広げ、交流を深めていきたいと考えています。

一つには、他地域への事業の展開です。これまでの教職員国際交流事業の成果を受けて、本年度よりタイ国が教職員招へい事業に加わりました。今後タイだけでなくアジア地域全体にこのようなプログラムを展開していきたいと思います。また、現在の二国間交流に加え、多国間交流への拡がりも視野に入れています。↖

二つ目には、国際交流事業の内容についてです。これまでのプログラムを継承しつつ交流がさらに深まるような内容にしていきます。訪問先についても、小・中・高等学校、特別支援学校に加え、例えば幼児教育施設、教員養成大学、図書館、公民館などを加えてもよいかもしれません。

子どもたちを取り巻く環境は多様であり、今後子どもたちは地球規模の課題を含め益々複雑かつ前例のない課題への対応が求められてくるでしょう。したがって、未来を担う子どもたちを育む教職員も様々な学びを通して変容していくことが期待されています。

2015年11月に招へい事業に参加されたタイの教職員の方々は学校訪問の中で、「目の前にいる子どもに真剣に接している先生の視線に国の違いはない」と感動し、その感動を日本の教職員の方々と共有し、互いに理解を深め合いました。ACCU人物交流部のコア・ヴァリュー（Core Value：基本的価値）は、国境を超えた教職員の「出会いと発見のお手伝い」です。対象国のニーズ、教育現場の声に耳を傾けながら、より良いプログラムを企画・実施していきます。

（人物交流部長　進藤 由美）

成果と内容

こんなプログラムを行っています

中国・韓国から日本へ

10年以上にわたり、中国、韓国から教職員を日本へ招き、日本各地で学校や教育機関、文化施設などを訪れ、教員との意見交換や児童・生徒との交流を深めるプログラムを実施しています。

これまでに50以上の自治体が受け入れ、延べ3,000名以上もの中国・韓国教職員が日本を訪れました。このプログラムを契機に、姉妹校提携など学校間の継続的な交流に発展するケースが多くみられる他、教職員同士の友情と交流が深まることもしばしばあります。

訪問を受け入れる側にとっても、海外の先生方との交流による客観的な気づきがあり、児童・生徒たちには世界を一歩身近に感じることができるきっかけとなります。

日本から中国・韓国へ

2003年から2006年まで毎年約10名の日本の教職員を中国へ派遣し、これらの成果が中国政府に評価され、日中国交正常化35周年を記念して、2007年から中国教育部による中国への招へい事業として実施されています。

また、2003年からは韓国政府による韓国への招へい事業も始まり、相互交流の広がりを深めています。

参加した先生はいま

交流事業は、その後の教育活動にどんな影響を与えましたか？

岡山県総社市立総社東小学校
室山 和久 校長先生
2010年中国派遣
（当時：総社市立総社小学校主幹教諭）

「教育は人なり」はどこの国でも共通。

子どもの学力や生活態度の向上において、担任や教師の役割が大きいということを再認識しました。そのためには教師のレベル向上が重要で、教員研修の内容や、いまの子どもたちの傾向をとらえて、どのように対応していくか、ということを行ないたいと思っています。

自分の教育活動の方向性を改めて確認しました。

大きな収穫は、自分の教育の方向性に自信が持てたことです。農業体験や地産地消を取り入れた給食の推進など、特に地域の産業に根ざした活動を行ってきたことは、間違いではないのだと思えました。

2011年の震災後に初めて連絡をくれたのが、韓国ユネスコ国内委員会のソさんでした。嬉しくて印象に残っています。

宮城県岩沼市立岩沼北中学校
阿部 陽 先生
2010年韓国派遣（当時：岩沼中学校）

中国の校長先生の言葉が支えになっています。

中国派遣に参加しました。上海甘泉外国語中学校校長先生が、「どんなに学力テストがよくても、社会のためになる人材でなければ何にもならない」と話されたことに感銘を受けました。私自身、自分で自立していける人、社会に役立つ人を育てることを目標としていましたので、後押ししていただいたような気がして、今でもその言葉は心の支えとなっています。

長崎県立大村高校
酒井 淑子 先生
2010年中国招へい（当時：島原農業高校）／2011年中国派遣

参加した先生方とは今でも切磋琢磨しています。

事業に参加した日本国内の優秀な先生方と地域、校種を越えたネットワークが広がることも魅力のひとつです。一部の先生方とは現在も繋がっており、様々な場面でお会いし、交流しています。私は2015年度から文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の研究開発主任をしていますが、本交流事業参加教員の先生方が全国各地でSGHの担当をされており、各学校で交流事業の経験を共有し、成果を還元されています。

神戸大学附属中等教育学校
岩見 理華 先生
2010年ESD日米教職員交流／2013年韓国派遣（当時：兵庫県立芦屋国際中等教育学校）

教育の役割を再認識できました。

以前私は、なぜ学ぶのかを曖昧にしていたように思います。しかし、研修後「知識は行動を変える」「よりよい社会をつくるには、グローバルな視点に立ち、思考力・判断力・行動力が必要」「人と人とのつながりが大切」等が教育活動の根幹になりました。信念がぶれず教育方針を語れるようになりました。

佐賀県嬉野市立嬉野中学校
池田 朋子 先生
2011年ESD日米教職員交流*
（当時：嬉野市立大野原中学校）

＊ ESD日米教員交流プログラム：2010年から2015年まで日米教育委員会の委託により実施。

タイとの交流が始まりました

人物交流部 齋藤 盛午

2015年より「教職員招へいプログラム」にタイが加わりました。7日間の滞在で、学校訪問や日本教職員・生徒との交流、文部科学省による講義で日本の教育について理解を深めたほか、明治神宮視察やホームステイを通して日本文化に触れました。

タイ語コースの生徒との給食交流会（関東国際高等学校）

渋谷区立原宿外苑中学校訪問で、生徒が「サワディカー」と挨拶をするとタイ教職員は自然と笑顔になりました。受入れにあたり事前学習としてタイ語の挨拶や文化などを学習していたとのことです。

タイ語コースを開講している関東国際高等学校では、タイ語を交えて生徒との給食交流会を行いましたが、多くの参加者から「日本に一生懸命タイ語を勉強する生徒がいると知りうれしい」との声があがりました。英語でも意思疎通は可能ですが、相手の母語を使うとぐっと距離が縮まるということをあらためて実感しました。

本プログラムでは、タイ教職員と同数の日本教職員が参加する「日タイ教育交流会議」を実施しました。5つのグループに分かれてディスカッションを行った際に、例えば「食育グループ」では給食指導やアレルギー対応などで両国の共通点を発見すると共に、休日にも各家庭に牛乳を届けるというタイの学校の取組みが紹介されるなど、互いの国の好事例を知り、新たなアイデアを得る良い機会となりました。北海道から参加された金澤裕司氏（羅臼町教育委員会）は、「児童生徒にとって海外との交流の機会を持つことは、教育上大きな価値を持つ。今回のプログラムをきっかけに、すぐにでも学校間交流が実現出来そうな見通しをもつことができたため、実現に向けて取組んでいきたい」と語りました。

DATA
プロジェクト名：国際連合大学　2015-2016年国際教育交流事業　タイ教職員招へいプログラム
実施期間：2015年11月9日（月）～15日（日）
参加人数：15名
団長：スプラニー・カムユアン氏（タイ教育省）
訪問校：荒川区立尾久宮前小学校、関東国際高等学校、千葉県立桜が丘特別支援学校、渋谷区立原宿外苑中学校

教職員間の持続性のあるネットワークを作ることができるプログラムだと思うので、今後も継続してほしい。

Sri Ayudhya School, Phichai Lueang-Aroon
スリアユタヤ高校
ピチャイ・ルアン＝アルン 先生

会議で、教育者として子どもたちに伝えたいこと（意識していること）というテーマで話し合った時、「自分がどう生きるか」ということももちろんだが、「世の中に役立つ人としてどう生きるか」という視点がタイの先生方には強いと感じた。

多摩市立愛和小学校
槇田 雅江 先生

ユネスコスクールの活動報告

ユネスコスクール全国大会プレイベントを開催しました

教育協力部 松尾 奈緒子

約1000校にもなる日本のユネスコスクール加盟校に、現在求められていること。「活動の質の向上」をめざすため、どのように加盟校同士が内発的、自発的にネットワークを構築し、学びあい、その関係を強化していけばよいのでしょうか？

ユネスコスクール全国大会の前日、2部構成でワークショップを開催しました。前半は、持続可能な開発のための教育（ESD）先進国であるイギリスからこの分野の第一人者アン・フィンレイソン氏を招き、イギリスで政府の協力が得られない中、ホールスクールアプローチ*を用いた持続可能な学校づくりをネットワークを介してどのように展開していったのかを講演していただきました。

後半は、ある加盟校の先生からユネスコスクール加盟校主体の全国ネットワーク設立に向けて提案があり、そのあり方、活用の仕方について意見交換を行いました。この呼びかけに、多くの参加者が大きな拍手で賛同を表明された瞬間は感動的でした。

ここで話し合われた内容は、全国大会でもより多くの方と共有されました。ワークショップは5時間にも渡りましたが、終始明るい雰囲気で進行し、積極的に意見交換されました。このプレイベントそのものが、これからのユネスコスクールのあり方を象徴しているように感じています。

ワークショップ風景（左上：アン氏と永田先生）

DATA
会議名：ユネスコスクール全国大会プレイベント～これからのユネスコスクールを考えよう～
日程：2015年12月4日　**参加人数**：ユネスコスクール加盟校教員を中心に103名
文部科学省委託平成27年度日本／ユネスコパートナーシップ事業
ファシリテーター：アン・フィンレイソン氏
コーディネーター：永田佳之先生（聖心女子大学文学部教育学科教授）

アンさんインタビュー

Ann Finlayson
Sustainability and Environmental Education（SEEd）のエグゼクティブ・チェア。30年以上にわたり主に学校教育を通して、地域全体を持続可能にするための教育に従事。イギリス教育省のアドバイザーとして幅広く活躍。SEEdはユネスコ本部のESDパートナーである。

Q：ワークショップを終えたお気持ちは？

A：日本の方を対象にしたワークショップを行なうのは今回が初めてで不安もありましたが、実際には、参加者のみなさんがアイディアを模造紙やポストイットに書きはじめるのがこれまで見てきたなかで一番といっていいほど、早かったです。
一番の喜びは、「ネットワーク構築のために何をする必要がありますか？」という問いかけに対して参加者の皆さんが私の講演の趣旨を踏まえて意見交換をしてくださったことです。

Q：参加者へのメッセージや今後の活動へのエールをお願いします。

A：参加者の皆さんへ一番伝えたいことは、ワークショップの場に流れていた「積極的な意識」を忘れないで欲しいということです。どのようにしたら小規模な形でそれぞれの状況に合った「積極的な意識」を作り出せるか、考えていただきたいと思います。それが今回のワークショップの成果を持続させる有効な方法です。知識やケーススタディーを作り出すより、ネットワークを作るための高い意識を持つことのほうが重要なときもあります。

聞き手：教育協力部　齋藤　美貴　（インタビューの詳しい内容はHPをご参照ください。）

＊　ユネスコが2015年から実施しているESDのグローバル・アクション・プログラム（GAP）の優先的行動分野2「機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組）」。一つの教科や活動だけでなく、学校全体（カリキュラム・運営・地域を含む）でのESDへの取組。

※　プレイベントの様子は制作物としてまとめ、ユネスコスクール加盟校を中心に配布されます。

ユネスコスクールの活動報告

ユネスコスクール全国大会の分科会で報告しました

教育協力部 齋藤 美貴

ESD Foodプロジェクトを、どう展開するのか？ このテーマのもと第7回ユネスコスクール全国大会の分科会で、発表とワークショップを行いました。参加校の先生方が、これまでの成果と課題を共有しました。

ESD Foodプロジェクト参加校の先生方。児童生徒とともに限られた時間の中で工夫しながら活動を展開しています。

分科会では参加者の皆さんと一緒に（ワールドカフェ方式*で）「国際協働学習を成功させるためには？」というトピックで話し合いをしました。学校間交流を単なる文化交流とせず、共通の課題解決を目指す内容にすること、ホールスクールアプローチで活動を展開すること、学習者主体のプログラムとすること、担当教諭が異動してもプロジェクトが校内で共有でき、誰でも活動を実施することができる継続的な仕組みを作ること等の意見が参加者から挙がりました。

分科会の前半では参加校７校が活動の進捗状況を発表しました。

国際協働学習をこれまで行ったことがある方、ない方がみんなで「想い」を共有しました。

ESD Food プロジェクト

【これまでの成果（一部）】

- 多様な教科担当教諭と連携してプロジェクトを進めている。
- 国際協働学習を行なってみて、言葉の問題、教育事情の異なり、ビデオ会議の日程調整等大変だか、異文化理解、自国理解が進んでいると感じている。
- プロジェクト実施を通してホールスクールアプローチとしてESDを実践できている。
- 学校と地域の連携が強化された
- プロジェクトを通して生徒が身近な問題に目を向け、関心を持つようになってきている。

【今後の課題】

- インフラ問題：インドとインターネットが繋がりにくい。
- 国際協働学習を調べたことの共有とするのか、それとも同じ問題に向けて解決を目指すプロジェクトとするのかによっても協働の度合いが違ってくるため、検討が必要。

＊ 参加者が各テーブルに分かれ議論し、ファシリテーター以外のメンバーが他のテーブルに移動して前の議論の上に議論してさらに内容を深めていく方式。

ESD Food プロジェクト

インドと日本 国際協働学習

「ESD Foodプロジェクト」は持続可能な社会をつくる「変化の担い手」としての若者を育むプロジェクトであり、国際協働学習と地域と学校に根付いた学習の推進がなされています。参加校は「食」を入り口に「経済」「環境」「社会」「文化」の視点から地域や世界が直面する問題を特定し、問題解決に向けて児童生徒自身が考え、行動します。日本から7校、インドから5校が参加し、ディスカッションを通じて学びあいを深めています。どの参加校もACCUが開発した「HOPE枠組み」に基づき、包括的、主体的、参加型、協働、エンパワーメントの視点を大切にしたプロジェクトを実施しています。

海外の学校との交流に関しては、インドと日本の学校両校はまず、簡単な学校紹介＆自己紹介ムービーを作成し、参加校と共有しました。その後テレビ会議を通してテーマごとに情報を共有し、ディスカッションを展開しています。インターネットの接続の関係で、画像の質が悪かったり、長い時間接続されなかったりと、技術的な課題もありますが、プロジェクトに参加する児童生徒は他校との交流を楽しんでいます。

大田区立大森第六中学校では地域の品評会に参加し、この地で栽培されている江戸野菜、馬込三寸にんじんについて地域の方にインタビューしました。

広島県立安古市高等学校にて。福島県立安達高等学校とビデオ会議を行なっています。

参加校が取り組んでいるトピック

	食と経済		食と環境	食と社会	食と文化
トピック	生産	食の生産⇒加工⇒流通⇒消費⇒廃棄	食と水の安全	食と格差、食生活の変化	伝統的な食と文化
具体的なトピック	・種（自家採種、購入種） ・土壌 ・遺伝子組み換え	・若者の農業離れ ・大量生産・大量消費・大量廃棄	・開発による地球環境の変化（水不足、水の汚染） ・仮想水（食料輸入→水使用）	・自然災害（防災） ・生活様式の変化	・食生活の推移・変化 ・理想的な食生活 ・地場産業への気づき
日本の参加校	MIHO美学院中等教育学校 東京都大田区立大森第六中学校	福島県立安達高等学校 広島県立安古市高等学校	神戸大学附属中等教育学校	ぐんま国際アカデミー中高等部	宮城県大崎市立大貫小学校
インドの参加校	Gem International School, Kannur	Kuthuparamba High School	Navodaya Vidyalaya, Wayanad	CKNS GHSS Pilicode	Kendriya Vidyalaya, Kannur

ACCU Programme

グローバル・アクション・プログラム

ユネスコスクールと気候変動

フランス、パリで開催されたCOP21。2020年度以降の世界の温暖化対策の大枠を決める重要な国際会議であり、地球の気温上昇を産業革命から2℃未満に抑えるという国際目標を達成するための話し合いに世界中の人々が注目しました。

教育協力部　齋藤 美貴

気候変動に対する学校の役割

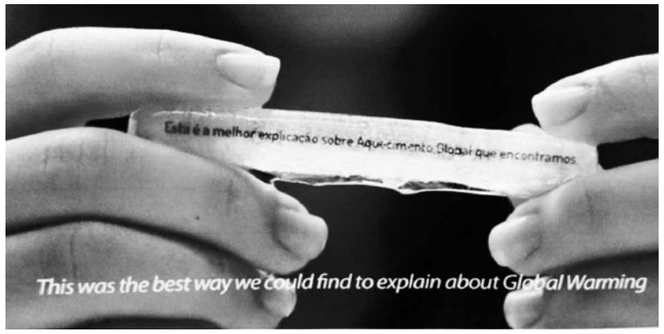
2015年11月30日～12月11日のCOP21期間中、ユネスコはその主要会場で気候変動教育および、気候変動の時代における若者の知識とスキル向上への支援というテーマでイベントを行ないました。

12月7日と8日にはユネスコパリ本部で「ユネスコ国際セミナー：気候変動に備える―気候変動へのユネスコスクールからの応答[*2]―」が開催されました。イリーナ・ボコバ事務局長は開会の挨拶で、学校は気候変動の最前線に立っており、グリーンシティズンとしての新しい世界のみかた、新しい物事の考えかた、新しい振舞いかた、新しい行動のしかたが求められていることを強調されました。

大切なのは多様な人たちとの協働

この国際セミナーには世界11か国のユネスコスクールの先生や生徒、教育の専門家が参加し、「気候変動に関する国際連合枠組条約[*3]」第6条で言及されている「教育」に具体的に貢献できる教育実践の共有と検討が行なわれました。ACCUは本セミナーでESDや気候変動教育を推進するための多様な関係者が協働することの重要性について発表しました。

特にESD Ricеプロジェクトや



気候変動教育の一例。「これが温暖化を説明するのに最も適切な方法である」というメッセージを入れた水を氷にし、生徒たちが実際にさわって氷が解けていく様子を体験するというもの。（ブラジル・サンパウロの学校）

ESD Foodプロジェクトの実践から学んだ、児童生徒が学習の中心となった学習ステップを活用すると、多様な人々（例えば地域住民、NPO、企業、研究所や行政機関）が学習に関われることを共有しました。

またACCUは、ユネスコが2015年から実施しているESDのグローバル・アクション・プログラム（GAP）の優先的行動分野2の「機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組[*4]）」でユネスコのキーパートナーとなっていることから、学校がESDをホールスクールアプローチで実施すると、多様な人々が学校と連携をする機会が増えるということを実例を基に紹介しました。

Key Partner
UNESCO Global Action Programme on Education for Sustainable Development

＊1　気候変動枠組条約第21回締結国会議　＊2　UNESCO International Seminar Getting Climate-ready ASPnet Schools' response to climate change
＊3　United Nations Framework Convention on Climate Change (UNFCCC)　＊4　Whole-institution Approach

第9回全日本高校模擬国連大会

先輩から後輩へつなぐ成長の場

国連会議のシミュレーションを通してグローバル人材の育成を目指す教育プログラム。今年は「国際移住と開発」をテーマに議論を交わしました。

模擬国連推進部　高松 彩乃

拍手で会議を終える高校生大使

先輩スタッフの頼もしい姿

大会は今年で9回目を数え、ACCUが関わり始めて4年目となります。このプログラムの特徴は、支援企業や外部との窓口であるACCUと、大学生を中心とした団体「グローバル・クラスルーム日本委員会」（以下JCGC）が役割分担をして共同で主催している点です。

大会の運営や議題の設定など、多くの部分を担うのは大学生を中心としたスタッフです。JCGCのメンバーを中心に、大学で模擬国連活動をしている学生、過去の大会参加者などが当日スタッフとして加わります。1年前の大会で受賞し、5月に国際大会に参加したばかりの高校生OBGも頼もしい姿を見せており、「先輩にしてもらったことを後輩につなぐ」ということが実践されていると感じました。

熱気と緊張に包まれて

本大会では、各国大使が壇上で行う「公式発言」（スピーチ）、着席した状態で挙手をして議論する「着席討議」、席を立って議論する「非着席討議」の3つの形式の討議で議論を深めながら、2日間で決議案の採択を目指します。全ての決議案に対する投票が終わると、参加国大使が会議の終了を提案する文言を述べ、会議を閉じるというルールがあります。2日間にわたる大会を締めくくる一言とあって、多くの大使が手を挙げました。ところがいざ指名されると、緊張もあってのことか、なかなか言葉が出てきません。すると大学生の議長が大使の言うべき台詞を優しく伝え、大使は無事に会議の終了を提案することができました。提案は満場一致で受理され、2日間の会議をやりきった高校生大使たちは、ほっとしたような、誇らしげな表情を浮かべて拍手をしていました。全国から選ばれた高校生が集うハイレベルな大会ですが、参加者をとりまく先輩たちの温かいまなざしに包まれた空間でもありました。

次回にはいよいよ第10回を迎える本大会。高校生の成長の場としてはもちろんのこと、先輩から後輩へとつないでいく場としても育ってきています。ぜひ今後ともご注目ください。

受賞校一覧＊1＊2

会議A
- **最優秀賞：**桐蔭学園中等教育学校Bチーム
- **優秀賞：**神戸女学院高等学部、渋谷教育学園渋谷高等学校Aチーム
- **ベストポジションペーパー賞：**愛知県立旭丘高等学校Aチーム

会議B
- **最優秀賞：**灘高等学校Bチーム
- **優秀賞：**麻布高等学校、関西創価高等学校Aチーム
- **ベストポジションペーパー賞：**東京女学館高等学校Aチーム

DATA
- **主催：**ACCU、グローバル・クラスルーム日本委員会
- **共催：**国際連合大学
- **実施期間：**11月14日（土）～15日（日）
- **開催場所：**国際連合大学　ウ・タント国際会議場、エリザベス・ローズ国際会議場
- **参加者：**高校生160名、引率教員約80名（全64校80チーム）、見学者約250名

＊1　参加者は会議A・Bの2つに分かれて会議を行いました。議題や規模は両会議とも同じです。
＊2　最優秀賞、優秀賞を受賞したチームは、5月に米国で行われる国際大会に出場します。

Pick up Information

2年目となる若者プロジェクト パキスタンからの報告

チャンワハーブ村の若者が低資金で建設した学校(ローコストスクール)

昨年は2つの村60名を対象にしましたが、本年は4つの村122名の若者がプロジェクト※に参加しています。

昨年より引き続き参加しているタクレ村の若者たちは、雨季になると土がぬかるみ歩きにくかった村の道路舗装を行なったり、村民、特に女性と子どもを対象にした健康診断イベントを行なったり、女子教育への意識向上キャンペーンを実施したり、文化活動や村の美化活動を通して村の持続可能な開発へ貢献しています。今年から新しく参加したチャンワハーブ村では、小学校がなかったことから若者グループが「学校」を建設し、新しく先生を養成して現在39名の子どもたちが勉強しています。

参加する若者は、活動を楽しんでいるだけでなく、そのことが自分たちの自信にも繋がっているようです。また、村民の間にも変化が見られています。女子教育に関する理解が徐々に高まってきていることや若者グループの意見に耳を傾けるようになったこと、資金援助をしてくれることなど若者の活動に価値を見出しているようです。次号ではバングラデシュでのプロジェクト活動もお知らせいたします。

※若者主体の接続可能なコミュニティ開発プロジェクト。現地のNGOサンジ・プリートと実施しています。

ACCU奈良の活動報告

文化遺産ワークショップ2015を ブータンで開催しました

奈良事務所　研修事業部長　中井 公

シムトカゾンでの撮影実習

「幸せの国」から要請があった研修のテーマは「文化遺産の写真記録」です。ジムゲ・ザンポ国民議会議長の臨席のもと、ブータンの伝統的な儀式を織り交ぜた開講式が行われ、研修は始まりました。講師は、奈良文化財研究所写真室の中村一郎さんと写真家の杉本和樹さん。文化財写真の分野で活躍中のお二人です。受講生は、国内の文化財保護の一線に立つ20名。文化局傘下の遺産保存課・国立博物館・国立図書公文書館などに所属する若者たちです。

文化財写真撮影の基礎知識について講義を受けたあと、二会場に分かれていよいよ撮影実習です。国立図書館では、石斧・小金銅仏・経典と版木・仏画を教材にして、考古遺物や美術工芸品の撮影方法を学習しました。撮影の前には、現地で容易に調達できる材料で、撮影台や照明スタンドなどの用具を製作する、実践的な準備作業も行いました。簡便な工夫ですぐに役立つと、とても好評でした。

もうひとつの会場は、ティンプー南郊のシムトカにあるゾンです。ゾンは、17世紀からブータン各地に建てられた、城塞・役所・仏教寺院を包括した大建築ですが、シムトカのゾンは現在、僧侶養成の初等学校になっています。ここでは、ゾンの建物全体を教材に、外観から内部まで、文化財建造物のさまざまな撮影方法を学びました。受講生の多くはこれまで、薄暗い室内の撮影に特に苦労していたといいますが、効果的なライティングと適切なカメラ操作で、きれいな記録写真が撮れることを実感したようです。

研修の様子は、ブータン放送や有力紙クエンセルで報じられ、地元が寄せる関心の高さを感じました。

ACCU活動メモ 2015年10月～2016年1月

①実施期間　②主催、共催団体名　③開催場所　④参加国、参加者数

JICA委託事業「アフガニスタン国識字強化プロジェクトフェーズ2」

共同企業体の一員として職員1名を派遣し、アフガニスタン教育省識字局とモニタリングや技術支援能力強化の活動を行う。
①10月27日（火）～11月20日（金）③インド国デリー市

国際連合大学2015-2016年 国際教育交流事業「タイ教職員日本招へいプログラム」

詳しくはP.4をご覧ください。
①11月9日（月）～15日（日）②国際連合大学、ACCU③東京都 ④15名

第９回全日本高校模擬国連大会

詳しくはP.9をご覧ください。
①11月14日（土）～15日（日）②主催：ACCU、グローバル・クラスルーム日本委員会、共催：国際連合大学 ③国際連合大学ウ・タント国際会議場、エリザベス・ローズ国際会議場 ④160名

ESD Food プロジェクト　モニタリング

詳しくはP.9をご覧ください。
1. ①11月25日（水）③神戸大学付属中等教育学校
2. ①11月26日（木）③福島県立安達高等学校
3. ①11月27日（金）③宮城県大崎市立大貫小学校

ユネスコスクール全国大会 プレイベント ～これからのユネスコスクールを考えよう～

詳しくはP.5をご覧ください。
①12月4日（金）②ACCU③日本出版会館④103名

第７回ユネスコスクール全国大会

詳しくはP.5～7をご覧ください。
①12月5日（土）②主催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会（ACCUは共催）③昭和女子大学 ④約600名

ユネスコスクール国際セミナーへの参加

詳しくはP.8をご覧ください。
①12月7日（月）～8日（火）②ユネスコ ③ユネスコパリ本部 ④世界11か国の教員

SDGsの中での教育に関する国際会議

ESD Foodプロジェクトパートナーのインド環境教育センター（CEE）主催の会議に参加。
①1/11（月）～13（水）②インド環境教育センター（CEE）③インド国アーメダバード

国際連合大学2015-2016年 国際教育交流事業「中国教職員日本招へいプログラム」

①1月18日（月）～24日（日）②国際連合大学、ACCU ③東京都、千葉県、熊本県荒尾市、長崎県長崎市、石川県小松市、福岡県 ④99名

奈良 世界遺産教室

奈良県内の高校生に、文化遺産保護の重要性を学んでもらう出前教室。
1. ①10月6日（火）③奈良県立法隆寺国際高校
2. ①10月14日（水）③奈良県立橿原高校
3. ①11月5日（木）③奈良県立畝傍高校
4. ①11月13日（金）③奈良県立五條高校
5. ①11月24日（火）③奈良県立吉野高校

奈良 文化遺産ワークショップ

詳しくはP.10をご覧ください。
①10月26日（月）～31日（土）②ACCU奈良事務所、文化庁、ブータン内務文化省文化局 ③ブータン王国・ティンプー ④20名

奈良 文化遺産の保護に資する研修（個別テーマ）

「博物館等における文化財の管理と展示活用」をテーマに研修を実施。
①11月10日（火）～12月8日（火）②ACCU奈良事務所、文化庁、国立文化財機構国立東京博物館、奈良文化財研究所 ③ACCU奈良事務所他 ④モルディブ、ネパール、スリランカの政府職員等研修生6名（各国2名）

奈良 文化遺産に関わる国際会議

「木造建造物の保存理念を再考する―アジアの木造建造物の価値の所在と真実性概念―」を議題に国際会議を開催。
①12月15日（火）～17日（木）②ACCU奈良事務所、文化庁、国立文化財機構東京文化財研究所、奈良文化財研究所、ユネスコ・アジア太平洋地区世界遺産研修研究所（上海センター）③ホテル日航奈良 ④19名

奈良 文化遺産国際セミナー

「造替の文化と世界遺産」を切り口に、将来の文化遺産保護のあり方について考える講演と座談会。
①1月9日（土）②ACCU奈良事務所 ③ならまちセンター・市民ホール ④300名

アジア東奔西走 第9回

中国流ホスピタリティ

ユネスコ・アジア文化センター　人物交流部
有薗 佳子

船から見える漓江の風景

「江は青羅の帯をなし、山は碧玉の簪の如し」唐代の詩人・韓愈が詠んだ風景は、今も桂林の地にあった。桂林は中国広西チワン族自治区の北東部に位置する。市内を南北に流れる漓江沿いには、雨水で浸食されたカルスト地形が生み出した奇峰が林立し、山水画のような景観が続く。

2015年5月、教職員交流プログラムの一環で、桂林で最も景観が美しいと言われる竹江埠頭から陽朔まで約83キロのクルーズを体験した。岩峰を縫うように流れる漓江は、晴れの日には青い川面に岩峰が映り、雨の日には霧が立ちこめ、水墨画のような風景になるそうだ。美しい風景は、人種や国境を越えて人の心を掴むものである。

今回は、日本の教職員25名と共に北京・南寧・桂林・上海の4都市を訪問した。中国側から訪問都市を知らされたのは出発の3日前と、普段綿密な計画をたててプログラムを実施している日本側の担当者は、仕事の進め方の違いを実感させられた。一方、現地では中国側が私たちの意向を確認しながら、柔軟かつ臨機応変に対応してくださる場面も多々あった。そのおかげで私たちは教育現場の視察のほか、貸切バスで夜市に行ったり、外灘の見学時間を確保できる等、中国のいろいろな面を見聞し、有益な時間を過ごすことができた。戸惑うこともあったが、中国の人たちの考え方や多様な対処方法を身を以て体験できた訪中だった。